

(特別支援学校版「学力向上実行プラン」様式)

令和4年度 阿南支援学校ひわさ分校「学力向上実行プラン」

阿南支援学校長 猪子 秀太郎

1 学力向上検討委員会構成

学 力 向 上 検 討 委 員		
	職名・校務等担当名	氏名
管理職	校長 教頭	猪子 秀太郎 森 浩一
学力向上推進員	教諭(教務課長)	渋谷 恵理子
委員	教諭(小・中学部長) 教諭(高等部長) 教諭(支援課長)	田中 敦子 上田 英見 児島 正典

2 学力・学習状況における現状分析, 目標等

【3つの視点】

- (1)基礎的・基本的な知識・技能の習得
- (2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成
- (3)主体的に学習に取り組む態度の育成

(小 ・ 中 学 部) 幼 児 児 童 生 徒 の 状 況			
よさ	学習活動にまじめに取り組むことができている。するべきことがわかりやすい環境設定を行ったり、取り組んだ成果を目に見える形でフィードバックしたりすることで、意欲的に取り組むことが継続してできている。個別の指導計画に基づいて、コミュニケーションや社会性に関する指導等を行うことで、各々に成長や行動の改善が見られた。	課題	自分で将来を見据えて、自立して取り組むことや意識して積極的に学習活動を行う姿が乏しく感じられる場面が見受けられる。少人数の学部であるためか、大きな集団や非日常的な環境では何もできなかったり消極的な対応になったりする傾向がある。それぞれにできることを増やし、自信を持って様々なことに積極的に取り組んでほしいと考える。また、支援が必要な場面では自分から適切に援助を求める力をつけていくことが重要であると思われる。
具体的目標(目指す子どもの姿)		成果指標	達成状況
自分でできることを増やし、自立して行動できる場面を増やす。また、必要に応じて適切に援助を要求する力を身につける。		個別の指導計画において、客観的なアセスメント等に基づく前期・後期の学期目標を一人につき3個以上設定し、その評価が「達成」「ほぼ達成」となる割合が75%以上となる。	客観的なアセスメント等に基づく目標を一人につき前期は3～8個、後期は3～6個設定した。前期目標の評価が、「達成」「ほぼ達成」となる割合が59%であったが、後期は77%となった。
			評価 B
具体的方策(教員の取組)		取組指標	取組状況
・標準化された検査によるアセスメントを行い、客観的な実態把握を行う。 ・個別の指導計画の年間目標及び学期目標にアセスメントに基づく目標を設定する。 ・個別の指導計画に関するケース会で目標と手だてを確認し、共有する。 ・指導の経過について、進捗状況等を見直しケース会等で報告し、指導について検討したり共通理解を図ったりする。 ・設定した目標に対する評価を行う。		・個別の指導計画において、客観的なアセスメント等に基づく学期目標を一人につき3個以上設定する。 ・個別の指導計画に関するケース会及び見直しケース会を年間5回以上行う。	・客観的なアセスメント等に基づく目標を前期は3～8個、後期は3～6個設定した。 ・個別の指導計画に関するケース会及び見直しケース会を前期に3回、後期に3回(転校生のケース会を含む)、年間6回実施した。
* 中間期の見直し			
達成状況を踏まえた改善事項			
個別の指導計画立案時に客観的なアセスメントの結果に基づく学期目標をケース会等で確認することで、アセスメントに基づく学期目標を意識的にたくさん立案することができた。しかし、目標の数が多いため指導が十分できなかったり、芽生え領域の幅が広く、高めの目標設定となってしまうため、前期の学期目標の達成率は低くなった。しかし、後期も継続して取り組むことで達成率が向上した。 特別支援学校において教育活動の中心となる個別の指導計画の立案に際しては、今後も年度当初に客観的なアセスメントを行い、児童生徒の実態に応じた目標設定ができるよう取り組んでいきたい。また、さらに達成率が向上するよう、今後もケース会等を通して意見交換をしながら学部で共有し、授業改善等を図っていきたい。			